

日本の鉞子、 世界の鉞子

元NHKエグゼクティブ・プロデューサー 内田義雄



奇跡のベストセラー

1925年（大正14年）末、ニューヨークで出版された杉本鉞子（英語名・エッ・イナガキ・スギモト）著「*Daughter of the Samurai*」（日本語版題名『武士の娘』）は、ニューヨーク・タイムズ紙をはじめ各紙で絶賛され、ベストセラーになった。当時アメリカでベストセラーになった本は、フィッツジェラルドの『華麗なるギャツビー』やヘミングウェイの『陽はまた昇る』などだったことを考えると大変な偉業といえる。その後この本は、フランス、イギリスなどヨーロッパ7か国で翻訳され出版された。日本語版が発刊されたのはかなりお

そく、1943年（昭和18年）のことである。先日、NHKが戦後70年企画のひとつとしてBSスペシャルでとりあげた際、『武士の娘』を「奇跡のベストセラー」とよんだのはこうした事実にもとづいている。（私の本が原案になったNHKの番組のタイトルは「武士の娘 鉞子とフーレンス―奇跡のベストセラーを生んだ日米の絆―」）

私が杉本鉞子の『武士の娘』に興味をもったとき、大きく2つの問題意識があった。

1つは、なぜ当時アメリカでそれほど賞賛されベストセラーになったか、ということである。彼女は越後長岡という片田舎で生まれ育った半生記を書いただけなのに、読んだアメリカ人がなぜ感動したのだ

ろうか。それは彼女が世界共通の価値観というものを語っていたからではないかと思う。これはすばらしい、日本にもそういう考え方や伝統があるのかと、日本人を見直したのではないかと思う。

もう1つは当時の歴史的状況である。トーマス・ハクスリーというイギリスの生物学者がいる。作家オルダス・ハクスリーの祖父にあたる人である。ダーウィンの進化論を非常に評価した人物で、その彼がこういうことを言っている。「自分が好きなことをできるようになったときこそ、人間にとって最悪の困難が始まるものなのだ」と（W・リップマン「道徳論序説」より）。それは単に人生の問題だけではなくて、政治でも社会でも歴史でも、そうなのだと思う。何でも



晩年の杉本鉞子

きるのだと思ったときこそ、謙虚にならなくてはいけない、抑制しなくてはならない。杉本鉞子の『武士の娘』はそれを語っていたのである。だから読んだ人たちは感動した。それは1920年代のことだったが、こんにち日本はどうなっているのかと不安を感じている人は多いと思う。時代的狀況は今日に似ているのではないかと思う。

生まれ故郷…越後長岡

『武士の娘』の冒頭に書いてあるように、杉本（旧姓稲垣）鉞子は日本海側の雪国に生まれている。越後平野の中央部にある長岡である。米どころであり、信

濃川と新潟の湊を控えた水上交通の要衝だった。

長岡城は越後平野の平潟につくられた平城で、今は何も残っていないが、たいへん美しかったという。信長や秀吉によって弾圧・誅殺された一向宗（浄土真宗）の信徒たちが、理想郷として設計したものだともいわれる。

長岡藩は7万4千石。家康に仕えた三河の牧野家が城主となった。親藩である。

鉞子の父は長岡藩筆頭家老の稲垣平助で、稲垣家も家康に仕えた武将で2千石、藩主の教育係でもあった。

幕末になると、藩の路線をめぐって稲垣平助は、藩主及び拔擢された河井継之助と対立する。稲垣平助は勤皇派で、將軍慶喜が朝廷に恭順・謹慎を受け入れてしまった以上、長岡藩も朝廷側に恭順すべし、と唱えた。しかし、あくまでも徳川家への忠誠を唱える藩主牧野家と家老・軍事総督の河井継之助は、朝廷軍との対決を主張。稲垣平助を罷免する。

こうして長岡藩は奥羽列藩同盟に加入し戊辰戦争へ突入する。朝廷軍は洪水で氾濫する信濃川を渡り、長岡城を攻撃。平城は半日で落城し、長岡の町の8割は焦土と化した。

鉞子の生い立ちと婚約

鉞子は、稲垣家の六女として明治5年（1872年）に生まれた。「鉞」は「まさかり」と読めても「えつ」と読める人は少ないであろう。稲垣家では長男のあと娘が5人も続き、6女はせめて男のように強い子にしたいと「鉞」と名付けたという。鉞子は男の子のような教育を受け、意思の強い子に育てられたようだ。

明治維新になって、恭順派だった稲垣平助は一時的に重用されるが、平助自身はそれをいさぎよしとせず、下野し「武士の商法」に挑戦する。しかしことごとくうまくいかなかった。

そのうち「主君のために命を捧げた」河井継之助にこそ見習うべし、という時代になり、主君に抵抗した稲垣平助は「腰抜け」「裏切り者」とされ、それ以来稲垣家の子孫は故郷では肩身の狭い思いをしてきたといわれる。

『武士の娘』には戊辰戦争で苦悩する父稲垣平助のことが、想い出すかのように随所に出てくる。鉞子は父が立派な武士であったことを誇りにしていたし、父の無念をよくわかっていて、しかし鉞子は、恨んだり、悔やんだり、怒ったりす

るようなことは一切書いていない。この我慢強さ、忍耐力、自制心は驚くばかりである。

家族で一番運命が変わったのは、鉦子の兄で長男の平十郎だった。明治になって、央（なかば）と名前を改める。

福沢諭吉の慶応義塾に入学するが、勉強をせず、退学して長岡へ戻る。そのうち家出して上京し、当時下士官を養成する「陸軍教導団」に入隊した。

央は教導団砲兵科を卒業して、東京鎮台砲兵伍長になるが、いつまでも「下士官」どまりであることを思い知らされ退役し、一旗あげようとアメリカへ渡ることが、それもうまくいかず、帰国する。生涯まともな職業に就けず、「人生の落伍者」（央の息子稲垣重政の証言）となっていた。

しかし、央がアメリカへ出稼ぎに行き、サンフランシスコで一文無しになって路頭に迷ったとき、助けてくれた人がいた。鉦子の未来の夫となる杉本松雄（本名・松之助）である。鉦子は兄の幹旋で松雄と婚約する。親戚一同の合意をえて母、金が鉦子に嫁ぎ先を告げる。当時の日本では女性はやがて決めたところに嫁ぐのが普通だったので、それを受け入

れた。婚約した時、杉本松雄は25歳、鉦子はまだ14歳だった。

杉本松雄は、文久2年（1862年）京都郊外の「草津の湊」で魚問屋を営む杉本庄太郎の2男として生まれた。4歳のとき父が亡くなり、母の手で育てられた。15歳のとき家出し、苦労の末、明治15年横浜から渡米したという。1896年にサンフランシスコからシンシナティへ移り、街の中心街で日本の工芸品や雑貨を扱う店「ニッポン」を開いていた。

故郷の教師・大道長安

鉦子の考え方に大きな影響を与えたのは、稲垣家の菩提寺である長興寺（曹洞



杉本松雄・鉦子・花野・千代野
（シンシナティ、1905年頃）（鉦子アルバム）

宗）の住職・大道長安師だった。この人を父が鉦子の師匠に選ぶ。こうして鉦子は6歳にして四書を学んだ。講義の内容は鉦子にはまったく理解できなかったが、師匠はきまって「百読おのずからその意を解す」と答えた。まさしくその通りだった、と鉦子を書いている。のちになって次第に、暗誦していた四書の大切な句の意味がのみこめるようになったからである。（ルース・ベネディクトは、日本の国民性を分析した著名な書『菊と刀』のなかで、『武士の娘』の文章を少なくとも6か所引用している）

長安のちにキリスト教の教えをとり入れた「救世教」を唱え、仏教会から破門された。鉦子は『武士の娘』（第6章「お正月」）のなかで、「このお方は、真実のためには、赤貧をも嘲笑をもいとわず、清契の群にくみしておられたのだと知りました」と書いている。

「清契」という漢字は、諸橋轍次『大漢和辞典』によれば、「清らかなちぎり」「清い交わり」の意味である。漢学の素養があった鉦子が大岩美代の翻訳を手伝わなかったら、こんな訳は生まれなかっただろう。

興味深いのは、この『清契の群』の英文は『the Army of the Few』即

ち「少数者の集団」、少数意見や異議を申し立てる人たちの意味である。信念のためには、赤貧も嘲笑もいとわない、「異端」「異教」といわれてもかまわない、信ずる我が道をいくだけである。そういう人々をさしている。これこそ「民主主義の精神」(the Spirit of Democracy)だと鉞子は書いているのである。しかし戦時中に出版された『武士の娘』日本語版(大岩美代訳)では、敵国アメリカの国是である「デモクラシー」をそのまま訳すわけにゆかなかったので、「四海同胞の精神」と訳されている。

民主主義というと、「なんでも多数決」と思っている人が多いが、多数決の決着というのは、意見をたたかわして、どうしても決めなければならぬときの手続きにすぎず、実は、そのプロセスが大事なのである。民主主義の本質はなにかといえば、少数意見や異議申し立てを尊重することにある。民主主義の「個人の尊重」とはそういうことであろう。

鉞子は、長安のエピソードのなかで民主主義の本質をさりげなく語り、そうした生き方をした大道長安師を生涯尊敬していた。鉞子がアメリカで「デモクラシーとはなにか」を体得していたことがよくわかるのである。

海岸女学校

鉞子はアメリカへ嫁ぐため英語を学ぶべく東京の「海岸女学校」に5年間かよった。女学校は、アメリカのプロテスタント(メソジスト監督教会)の婦人伝道会が、明治10年築地鉄砲洲の外国人居留地に設立したミッションスクールであった。のちの青山女学院、今日の青山学院大学の前身である。明治になって日本へやってきた宣教師たちの多くは、まだ20代から30代の女性たちで、若々しく使命感にあふれていた。

鉞子によれば、女学校で学んだことは、開放感、表情の豊かさ、質問することの大切さ、ユーモア、民主的な規則(democratic rules)を学ぶこと(大岩訳では「学校内の平民的な規則」と訳されている)、そして聖書の教えなどであった。

鉞子は女学校で異質文化を知り、在学中にキリスト教の洗礼を受けている。これは鉞子の人生のなかで最も重要な転機の一つである。

鉞子は渡米前、伝道会から支給された奨学金を返済するために浅草で5年間、伝道会が経営する小学校の教師を務め

た。浅草の5年間は並大抵の苦労ではなかったであろう。婦人伝道会の年次報告書が残っているが、「稲垣鉞子は子ども達の心をつかみ皆から愛されている」と報告されている。

オハイオ州シンシナティ

明治31年(1898年)春、鉞子は渡米する。婚約してから12年、鉞子は26歳になろうとしていた。

19世紀末、鉞子が渡ったアメリカ社会は大きな変化をとげようとしていた。

1861年に始まった南北戦争で両軍をあわせて62万人もの兵士が死亡し、ジョージア州など南部諸州は未曾有の荒廃に陥った。その後、南部の再建や西部の開拓が飛躍的に進むと、大陸横断鉄道、鉄鋼業、石油の発見と開発、金融業の発達など、アメリカ的資本主義が急速に発展する。社会全体で異常な物欲主義や金権政治が横行し、『トム・ソーヤーの冒険』の作家マーク・トウェインは、この時代を「金メッキ時代(Gilded Age)」と呼んだ。

鉞子が向かったオハイオ州は、まさに変化しつつあるアメリカの真っ只中にあった。南部のヴァージニア州が「建国

の父祖たち」を生んだ農業を基盤とする保守的な州だったとすれば、北部のオハイオ州は、19世紀後半アメリカ資本主義を発展させた先進的な州だった。

シンシナティは、西部開拓の主要ルートであったオハイオ川の交易港として栄え、「西部の女王」と呼ばれた。街には雑貨店、ホテルなどが立ち並び、西部へ向う人たちで賑わった。鉄鋼、食肉、衣料、木材、消費材などで栄え、1880年代末には人口30万、オハイオ州最大の都市となった。

シンシナティは逃げてくる南部の黒人奴隷たちを保護して逃亡を助ける所謂「地下水道」の重要な拠点ともなっていた。内戦が勃発すると、シンシナティは連邦軍（北軍）の橋頭堡となった。

フローレンスとの出会い

鉞子は松雄が懇意にしていたシンシナティのウィルソン家で結婚式をあげた。ウィルソン家の当主オーベッドは教科書出版で財を成した資産家で、夫妻とも敬虔なメソジスト派のキリスト教徒だった。メソジスト派は、18世紀のイギリスで生まれたプロテスタントの一派で、質素で規則正しい生活方法（メソッド）の

実践をめざすことで知られている。イングラント国教会から迫害され、新大陸アメリカへ渡ったピューリタンである。西部開拓と共に信者をふやした。

ウィルソン夫妻は大の親日家でもあった。夫妻は船旅で、1886年秋にオーストラリア、ニュージーランドへ行き、翌年春、日本に立ち寄って4、5か月間滞在し、日本の文化や日本人の魅力に目が開かれたという。このときに同行したのが姪のフローレンス・ウィルソンだった。結婚式で花嫁の鉞子に付き添ったのがフローレンスである。彼女も日本が大好きで鉞子を心待ちにしていた。鉞子26歳、フローレンス42歳。まさに運命的な出会いであった。

フローレンスが生まれたのは、オハイオ州のとなりインディアナ州のニューアルバニーである。シンシナティから車でおよそ2時間、歴史から忘れられたような静かな町である。しかし19世紀半ばこの町は、蒸気船建造や農産物の集荷場として栄えていた。フローレンスの父ジョン・ウィルソン（オーベッドの兄）は弁護士で共和党員、リンカーンの熱心な支持者だった。

1869年フローレンスは地元のプロ女子学院へ入学した。13歳のときであ

る。学校は4年制で寄宿舎生活を義務づけられていた。彼女は特に英文学に関心が高く、シェークスピアを研究している。

「授業中の私語は一切禁止」「寄宿生は先生の同伴がない限り学校の敷地の外へ出てはならない」「通俗小説を読むことを禁ず」など厳しい規則を定めていた。鉞子があうけた「武士の教育」にどこか通じるものがあり、フローレンスがのちに「武士の娘」鉞子にこのほか親近感を抱いたこともうなずけるのである。興味深いのはフローレンスの卒業エッセーである。「女性の本望は、政治の世界や討論会の闘士になることではなく、愛すべき『家庭の王国』の戦士になることにある。家庭にこそ女性の気品が輝くのであり、女性の影響力が力をもつのである」と書いている。当時アメリカでは、女性のあいだから禁酒運動や婦人参政権運動が高まり、女性の社会進出が大きな話題になっていた。そうした時代的な変化のなか、あえて「家庭の大切さ」をフローレンスは強調していたのである。

鉞子の里帰りに同行

明治35年（1902年）春、鉞子は3歳になる長女花野を連れて越後長岡へ里

帰りしている。このときフローレンスが同行した。一度日本に住んでみたい、とフローレンスが強く希望していたらしい。鉞子は、フローレンスと一緒に1年間近く長岡に滞在した。2人の友情はますます深まった。鉞子は、翌年アメリカへ戻るが、フローレンスはそのまま残り、もう一冬を過ごす。このときの体験が、のちに鉞子が『武士の娘』を執筆するときに、フローレンスが貴重な助言を与えることを可能にしたのである。なによりも鉞子が日本独特の伝統文化を英語で表現するときに、フローレンスの助けがなかったら、欧米人が理解し感動するような英文にはならなかったのではないかと考えられる。

長岡でフローレンスは、まさに伝統的な日本の田舎の文化になじんだ。彼女は畳の上に何時間でも静かに座っていた。食事もすべて日本のものを食べた。「わたしは日本人と同じように感じ、同じように考えていたのです」と話していたという。

このときフローレンスは長岡中学に雇われ英語を教えた。長岡中学で初めて女性教師（それも外国女性）を採用したのは、校長の坂牧善辰である。当時35歳。坂牧は東京帝国大学哲学科卒業。一高時代に



フローレンス・ウィルソン
(着物姿1915年頃東京にて)

漱石と同期だった。坂牧は石油成金の息子たちを学校で狼藉をはたらいたとして退学させたが、成金の父兄たちがむしろ坂牧校長を排斥・追放した。その経緯は漱石が小説『野分』でとりあげている。

『武士の娘』執筆

1908年松雄の店が倒産し、鉞子は娘2人を連れていったん帰国する。2年後、松雄は急死。フローレンスに「鉞子と娘たちをよろしく」と遺言したという。そこでフローレンスはシンシナティの家を売り、東京の鉞子たちの元へきて東京で一緒に暮らした。しかし1916年鉞子は帰国子女の娘2人の教育のため、再びアメリカのシンシナティへ渡った。その後花野がコロンビア大学の姉妹

校バーナード・スクールに入学するため、1918年ニューヨークへ移った。48歳だった1920年から7年間、鉞子はコロンビア大学で日本語及び日本の歴史を教えた。コロンビア大学で日本女性が長期的に講師として採用されたのは初めてだった。鉞子がのちのコロンビア大学の日本文化研究講座の基礎を築いたといっている。当時、大学の界限では、「教壇に立つ小柄な和服の婦人」として話題になった。

しかし生活は決して楽ではなく、フローレンスに勧められて、鉞子は新聞や雑誌へ投稿する。フローレンスが英語の推敲を手伝った。2人の共同作業であった。

鉞子のエッセーを評価し、『武士の娘』執筆をすすめたのは作家のクリストファー・モーレーだった。

モーレーはペンシルヴェニア州のハーヴァード・カレッジを首席で卒業、ローズ奨学生としてオックスフォード大学に留学し近代史を学んだ。編集者、コラムニスト、小説家、詩人。著書はベストセラーとなった『キティ・フォイル』（1939）ほか多岐にわたる。

『武士の娘』は1925年ニューヨークで出版されると、大変な評判になったが、モーレーは「歴史が正しく書かれさ

えすればロマン小説など必要でなくなる」というアメリカの国民的詩人ホイットマンの言葉(『草の葉』序文)を引用して賞賛している。「杉本鉞子の本はまさに正しく書かれた歴史の本だ」というのである。

時代的背景

その時代的背景を考えると、第1次世界大戦という未曾有の体験をしたあとの世界だったということである。

大戦後の1920〜30年代とは、一言でいえば、「繁栄と幻滅の20年」だった。アメリカは戦争景気のおかげで未曾有の繁栄を享受し、豊かな繁栄の中で「マネー・ゲーム」の熱狂に多くの人たちがのめりこんでいった。他方では、それまで意味をもっていた宗教やモラルや価値観に疑問が投げかけられ、「家庭崩壊」という深刻な変化が生まれ、従来のコミュニティが機能しなくなりはじめた。

多くの人たちは、繁栄や自由を享受しながらも、どこか自信を失い不安を感じていた。繁栄にも自由にもなじめない若者たちは「ロスト・ジェネレーション」と呼ばれた。ウォルター・リップマンは、「道徳論序説」のなかで「今日の若

者たちは、人生にはなにか意味がある、という確信を失った」と書いている。時代は豊かで自由になったが、若者たちの多くは生きる目的がわからなくなっている、というのである。繁栄と狂奔は1929年の大恐慌とともに崩れていった。同時代に、『武士の娘』に描かれた謙虚でゆるがない日本人の生き方や考え方が、アメリカや世界の読者に感動と共感を与えたのである。

ジャパン・ソサエティの応援

『武士の娘』には、ジャパン・ソサエティ版といわれるものがある。(ジャパン・ソサエティは1907年に創立された日米親善のための組織で、百年以上たった今も存続している。)

これはジャパン・ソサエティが出版社に特別発注をした初版本で、杉本鉞子の署名つきである。当時の新聞によると、ジャパン・ソサエティは2500部をオーダーして頒布している。当時アメリカでは日本移民の制限が行われ、日米間に緊張が高まっていた。『武士の娘』は日本を理解するための重要な教養書と評価されたのである。

ジャパン・ソサエティが杉本鉞子に注

目したのは、無論その本の内容もあるが、当時の理事長がヘンリー・タフトであったことが幸いした。タフト家は、鉞子が最初に住んだシンシナティの名門である。ヘンリーはニューヨークの著名な弁護士で、ジャパン・ソサエティ理事長を1922年から通算14年も務めた。親日的で日米親善に心をくだいた。弟のウィリアムはフィリピン初代総督、大統領、最高裁長官等を歴任し、ヘレン夫人は、東京市長尾崎行雄から贈られた3千本の桜の苗木をワシントンのポトマック河畔に植樹したことで知られている。タフト家は鉞子の家族とも交流があった。しかしジャパン・ソサエティやタフト家の努力も虚しく、1931年9月満州事変が起こり、日米関係は暗黒の時代へと進んでいく。

鉞子が語りたかったこと

1932年末、鉞子は本を出版してくれたニューヨークのラッセル・ダブルディ夫妻にフローレンス逝去の悲しみを伝えている。

「言葉と精神のいかなる意味においても、彼女は私の母でございました。30年以上にわたる私の友人でした。：彼女は

まるで眠るように逝ってしまわれました。これまで私の生涯でみた最も美しい最後でした」(筆者訳)

フロレンスは鉞子を支え執筆に協力したが、自分の名前を出すことを禁じた。だから『武士の娘』の中でフロレンスは「一切登場しない。恐らく『アメリカの母上』という表現がフロレンスにあたるであろう。それは「無償の行為」ともいえるものだったが、鉞子にはわかっていた。キリスト教信仰に篤いフ



ローレンスが鉞子に捧げた「愛のかたち」だったのである。杉本鉞子は『武士の娘』のあと、『成金の娘』、『農夫の娘』、『お鏡お祖母さま』を書いている。彼女がなにを語ろうとしたかといえば、まず第1に家庭愛や人間愛が大事だという世界共通の価値観である。第2にどんな運命にも挑戦する不屈の精神、負けないうという意思の強さが大事ということである。第3に、民主主義の精神ということである。個人の尊重であり自立心である。第4に「非戦」ということである。戦わずして勝つのだという考え方である。それは父親譲りの信念であった。

鉞子の魅力は、愛される人だったのではないかということである。鉞子は謙虚でつましく、ユーモアを解し、日本の歴史にも詳しくあった。教養あるアメリカ人にとって、鉞子との対話はいへん楽しかったようである。

鉞子は「歴史」から多くのことを学んだ。世界に例のない独特の文化を築いた日本が、幕末維新を経て、西欧文明を「接ぎ木」のように強引に移植していった歴史の行く末に、大きな疑問を感じていた。漱石にせよ鷗外にせよ、明治の知識人たちの多くは、江戸時代につちかわれた日本人の伝統的な精神や教養と、西

洋的な近代化とのズレや葛藤に苦悶していた。

鉞子は国から一銭の援助をうけることなく自力でアメリカへ渡り、通算22年間暮らしてアメリカ人との交流を深めた。英語で『武士の娘』を書くが、日本語を忘れることはなかったし、子どものときに学んだ漢文も覚えていた。

杉本鉞子こそ本物の国際人だった。

(2015年9月24日・公開フォーラム)

【参考文献】

杉本鉞子著、大岩美代訳『武士の娘』

(ちくま文庫)

内田義雄『鉞子 世界を魅了した「武士の娘」の生涯』(講談社)、『武士の娘 日米の架け橋となった鉞子とフロレンス』(講談社+α文庫)

【註】写真提供「杉本鉞子研究会」ほか(無断使用禁ず)

講師略歴(うちだ よしお)

1939年新潟県長岡市生まれ。東京大学西洋史学科卒業。NHK入局、新潟放送局、外信部、サイゴン、ニューヨーク、報道局、NHKエンタープライズ・アメリカ社長歴任。現在、フリー・プロデューサー兼著述業。